

資料

2018年度における生物（動物関係）に関する問い合わせ状況

中島 淳・石間妙子・金子洋平・須田隆一

当所で窓口依頼検査以外で回答した動物に関連する問い合わせの内容について概要をまとめた。2018年度は電話や持ち込み、電子メールによる質問が57件であった。問い合わせは県庁各課・保健福祉環境事務所・県警察等の県機関から28件、市町村から12件、民間業者から3件、一般県民から14件であった。前年度12件の問い合わせがあった特定外来生物ヒアリ類疑い種の同定依頼は3件と激減した。一方で、前年度4件であったゴケグモ類疑い種の同定依頼は11件と増加した。また、同じく特定外来生物のツマアカスズメバチ疑い種の同定依頼は1件であった。

[キーワード：衛生害虫、ペストコントロール、アリ、ハチ、クモ]

1 はじめに

当所では窓口依頼検査として生物同定試験を実施しているが、それ以外にも日常的に電話や持ち込み等による生物に関する問い合わせに答えることが多い。本報では2018年度に寄せられた質問のうち、動物に関連するものについてその内容をまとめた。

2 方法

動物に関連する各問い合わせについて、依頼元を県、市町村、民間業者、一般県民、その他の5つに区分した。また、質問内容については一般的な不明種に関する同定依頼、ゴケグモ類疑い種（セアカゴケグモ、ハイイロゴケグモ）の同定依頼、マダニ類疑い種の同定依頼、ツマアカスズメバチ疑い種の同定依頼、ヒアリ類疑い種（ヒアリ、アカカミアリ）の同定依頼、生物多様性・外来種に関する一般的な質問、その他、の7項目に区分して整理した。

3 結果及び考察

表1に2018年度の月ごとの問い合わせ件数を示す。全体で57件の問い合わせがあり、最も問い合わせが多かったのは5月の14件で、次いで7月が9件、6月が8件であった。例年冬季の問い合わせ件数はきわめて少ないが、本年度は1月に4件、3月に5件の問い合わせがあった。全体の問い合わせ件数は2010年度が24件、2011年度が24件、2012年度が57件、2013年度が68件、2014年度が52件、2015年度が51件、2016年度が55件、2017年度が54件であり¹⁾、問い合わせ件数は前年度と同程度であった。

図1に問い合わせの依頼元と件数を示す。問い合わせは県機関からのものが最も多く、県機関では保健福祉環境事務所からの問い合わせが多かったが、ほぼすべての場合において所管市町村または県民からの質問の仲介であった。市町村からの依頼も同様に一般市町村民からの質問の仲介であった。依頼元の傾向は過去と比較して、大きな違いはなかった。

表1 各月における内容別の問い合わせ件数

質問内容	月												計	
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
不明種同定依頼		10	4	5	4				1		3		3	30
ゴケグモ類疑い		1	1	4	2	2						1		11
マダニ類疑い														0
ツマアカスズメバチ疑い				1										1
ヒアリ疑い		2				1								3
生物多様性・外来種				1				1		1			1	4
その他	1	1	1					1	1		1	1	1	8
計	1	14	8	9	6	3	2	2	2	1	4	2	5	57

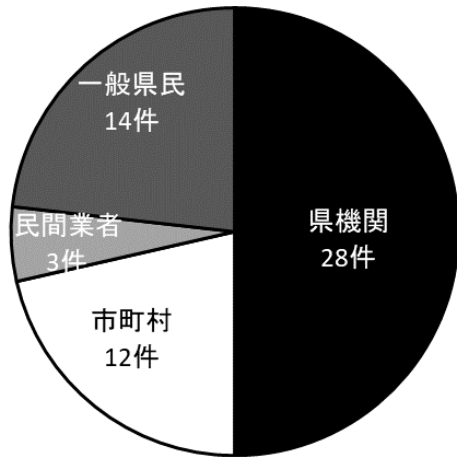


図1 2018年度における問い合わせ元の件数

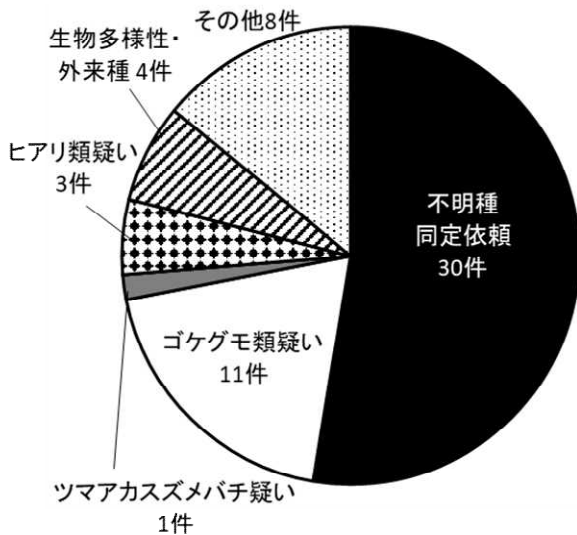


図2 2018年度における内容別の問い合わせ件数



図3 大牟田市内の水路で発見されたオオアタマヒメニオイガメ (写真提供/塘田義則)

問い合わせの具体的内容は不明種に関する同定依頼が30件と最も多く、次いでゴケグモ類疑い(11件)が多かった(図2)。昨年度はヒアリ類疑い種に関する問い合わせが12件と激増したが、本年度は3件のみと激減した。福岡県では2018年8月に「ヒアリ等対応マニュアル」を公表しており²⁾、これにより各保健福祉環境事務所及び市町村での対応が適切に行われた成果と考えられるが、一方で県民の興味・関心が低下したためである可能性も否定できない。なお、寄せられた3件はいずれもヒアリではなく、ヤガタアリグモ、アミメアリ、ヒメアリであった。

ゴケグモ類疑い種として問い合わせがあった11件のうち、セアカゴケグモであったのは3件で、その他はマダラヒメグモ(3件)、オニグモ(1件)、イエオニグモ(1件)、ヤマトコノハグモ(1件)、タカラダニ類が付着したザトウムシ類(1件)、同定不能(1件)であった。また、ツマアカスズメバチ疑い種として問い合わせがあった1件は、コガタスズメバチであった。

その他の不明種同定依頼において種まで同定できたのは、アオダイショウとハイタカがそれぞれ2件、タバサナエ、ムカシトンボ、ゴマダラカミキリ、シロモンオビヨトウ、セグロアシナガバチ、クマバチ、キクメハシリグモ、アカミミガメ、オオアタマヒメニオイガメ、ケヅメリクガメ、ニホンマムシ、キジバト、アオサギ、シロハラクイナ、ツミ、フクロウ、ホンドギツネ、アナグマが1件ずつであった。このうち、ハイタカ、ツミ、アオサギは県域で死亡していたもので、鳥インフルエンザ検査対象種としての同定依頼に対応したものである。また、オオアタマヒメニオイガメは北アメリカ大陸南東部が原産で、ペット用に流通している水生のカメ類である。県内における本種の野外での初の発見例と思われる(図3)。当該個体は現在、大牟田市役所職員が飼育を行っている。

本報をまとめるにあたり、クモ類の同定に際してご教示いただいた馬場友希博士(国立研究開発法人農業環境技術研究所)、爬虫類の同定に際してご教示いただいた田原義太慶氏、オオアタマヒメニオイガメの写真を提供いただいた塘田義則氏(大牟田市役所)にこの場を借りてお礼申し上げる。

文献

- 1) 中島 淳ら：福岡県保健環境研究所年報，45，128-129，2018.
- 2) 福岡県環境部自然環境課：福岡県ヒアリ等対応マニュアル

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/46188.pdf> (2020/9/1アクセス)